

幕末明治の写真師列伝 第三十二回 鈴木真一 その三

ここで少し時間を戻して真一の家族について記すと、真一が鈴木與七の女婿となって、最初の妻との間にできた子は、長男の金次郎と長女の信子であった。だが信子が5歳の時にこの最初の妻は亡くなっている。

真一はその後、少々遊んで外の女に産ませたのが二男の伊三郎だったが、婿養子の身で外に子供を作ったことを養父母には言い出せず、養父母が亡くなった後に再婚した時に合わせて伊三郎を家に連れてきた。(伊三郎の実母の名は不明) この時の再婚相手はおきんさんという女性で、そして再婚後におきんと間にできた子が二女の三七子であった。明治4年(1871)、真一が37歳の時である。しかしながらこのおきんも三七子を産んで、産後の肥立ちが悪くすぐに亡くなってしまった。

そこでまだ赤ん坊の三七子の世話を古くからばあやをしていたために任せてはいたのだが、明治6年(1873)の夏の終わりに、西郷美遠子という人と再婚することにした。西郷美遠子は長坂忠光に一度嫁いていたが死別している。(この再婚は、西郷頼母研究会編『幕末激動期の会津藩家老 西郷頼母近恵の生涯』(牧野出版、昭和52年)によれば、明治8年(1875)11月と書かれているが、それまで同居していた西郷美遠子の兄、西郷頼母近恵が、明治8年(1875)8月3日に福島県東白川郡棚倉の都々宮神社宮司に就任していることや、鈴木真一と美遠子の最初の子である四十(よそ)が昭和3年(1928)、享年55歳で亡くなっていること(逆算すると四十は明治7年(1874)の生れ)や、次女・四二子が明治39年に享年31歳で亡くなっていること(逆算すると四二子は明治9年(1876)の生れ)から、明治6年(1873)の夏の終わりと考えた方がよいと思われる)西郷美遠子は西郷近思(ちかし)と律子(小森氏)の六女で、他の兄弟姉妹は上から順に長女・たよ(生駒直道に嫁ぐ)、長男・西郷頼母近恵、次女・曾与(早世)、三女・(早世)、四女・八代子(井深宅右衛門重義に嫁ぐ)、五女・幾与子(一瀬隆智に嫁ぐ)、次男・直節(陽次郎)(山田家に養子に出て、後に雲井龍雄事件で連座、流罪となり函館に於いて獄死)、七女・眉寿子(26歳で会津戦争の際に自刃)、八女・由布子(23歳で会津戦争の際に自刃)、三男・瑚三郎(早世)、四男・説近(永四郎)(18歳の時に会津戦争で戦死)という悲劇の一族の娘であった。

美遠子の再婚の話は、兄、西郷頼母近恵が明治4年に静岡から伊豆江奈村に移り住み、地元の子弟に国史、国文、漢学を教えたところ、翌明治5年3月から江奈村の旧陣屋内に設けた「謹申学舎」に迎え入れられてこの塾長となり、この塾の同僚であった依田佐二平、勉三の兄弟と親しくなったことに機縁している。依田家は元々信濃國小県郡の出身で、武田家が滅亡後、一族を連れてこの地に帰農したといわれる名家であった。依田佐二平は大正13年、79歳で亡くなるまで、その生涯を養蚕、海運、開拓、金融、教育事業などなど多方面に大きな功績を残し、第1回衆議院議員にも当選している。依田勉三は西郷頼母近恵の教え子として「謹申学舎」で学び、後に慶応義塾に入学し横浜のワッデル塾で英語も学んで、北海道十勝開拓の功労者の一人となっている。この依田佐二平、勉三の兄弟の実母が、鈴木真一の姉・文(ぶん)であったのだ。媒酌人は真一の師である下岡蓮杖夫妻、真一側の出席者は真一の姉、文の長男である依田左二平、ふじ夫妻と左二

平の弟、依田勉三であった。一方、西郷美遠子側の出席者は、美遠子の兄、西郷頼母近恵と頼母の長男、有鄰(幼名吉十郎)、美遠子の姉(四女)の千代子と千代子の夫である井深宅右衛門重義という人々であった。

親戚が一堂した時、真一は自分の子供たちを並べて美遠子に紹介した。長男の金次郎は家業の写真を手伝いながら依田勉三と同じワッデル塾で英語を学んでいた。長女の信子は18で家事見習い中、二男の伊三郎はまだ9歳、末子の三七子はまだ赤ん坊である。

真一は美遠子と入籍すると同時に岡本圭三を養子にしている。岡本圭三は上州勢多郡の農家の三男で、蓮杖門下の弟子たちの中でも優秀な男であった。この岡本圭三をアメリカへ留学させることと真一の娘、信子の婿養子にすることを岡本圭三の親と約束して、婿養子とした。これが後の二代目鈴木真一である。

明治7年12月21日未明、真一にとっては五番目の子供、三男が生まれた。この子は真一が40歳の時に生まれた子であったので、四十(よそ)と名付けた。

明治8年、養子の岡本圭三が信子を連れて名古屋に移り独立開業する。そしてこの年の終わりには真一の孫、保羅(ほろ)が誕生している。これは岡本圭三がアメリカ留学に備えて英語を学ぶために米人宣教師のいる教会に出入りしているうちにキリスト教の神髄に触れて、ついには洗礼を受けてクリスチャンになったことから、生まれた長男にも洗礼を受けさせて、パウロに近い名を付けたのであった。

明治9年、真一と美遠子の間に今度は娘が生まれ、ヨニ子と名付けた。これも真一が42歳の時に生まれた子であったことから、「四二」を「ヨニ」としたのである。

明治12年、岡本圭三は兼ねてからの約束だったアメリカ留学のため、名古屋の写真館を宮下欽に譲って、横浜の義父である真一の元へ帰ると、信子と保羅の面倒を真一に頼み、すぐに留学の準備することにした。実はこの時に西郷頼母近恵の長男、有鄰(幼名吉十郎)も政府派遣の留学生選抜に合格して同じ船に乗ってアメリカへ留学することになった。岡本圭三の私費留学ではあったが、差し当たっての寄宿先もニューヨークの同じ下宿に決めた。ところがである、有鄰は留学前の準備中に風邪をこじらせて重度の肺炎となり、東京神田和泉町の医科大学病院に入院することになる。そして明治12年8月9日、22歳の短い生涯を閉じてしまった。

明治14年、岡本圭三がアメリカで写真修正術を学び帰朝すると、真一はそれに先立ち東京麹町飯田町二丁目五十三番地に洋風の小じんまりとした写真館(鈴木写真館九段坂支店)を建てて、岡本圭三にその運営その他を任せた。岡本圭三はアメリカから最新鋭の写真機を二つ持ち帰り、この九段坂支店で使い始める。その写真は写される間の時間も短く、また画像も鮮明で写真師仲間の評判を呼んだ。また、この当時のガラス湿板写真の修整はスチルフリードより伝授されたサンダラックニスで行う方法であったが、岡本圭三がアメリカで学んだのはラパニックスニスで修正する技術で、岡本圭三の元にはこの新しい技術を学ぶために写真師仲間が次々と訪れ、また入門を希望する若者も多かった。

(森重和雄)